近代思想社の思想圏
――伝統・故郷・民衆と文学論争の1910年代――

村田 裕和

この論文は、1910年代の日本の小説、評論そして文学論争にあらわされた、民衆・伝統・故郷についての研究である。さらに、そうした言説のイデオロギー性を批判した近代思想社の人々――雑誌「近代思想」を発行した大杉栄・荒畑寒村・安成貞雄――にも言及する。

第1章では、自然主義者である島村抱月や田山花袋の文学論をとりあげて、「自然」と「文明」の関係がどのように認識されていたかを確認する。さらに、宮崎湖処子や国木田独歩の小説をとりあげて、「故郷」という空間のもつ意味を論じる。

第2章では、絵画論の中で、「芸術」という領域がどのように作り出されたのかを考察する。石井柏亭や木下杢太郎は、ローカル・カラーを描くことを主張し、高村光太郎や武者小路実篤は、生命の表現を主張して彼らに対抗した。

第3章では、大杉栄の思想について考える。彼は、自然主義文学論を批判し、民衆芸術を提唱した。その結果、彼は、民衆に「教養」をあたえようとする知識人や芸術家と戦わなければならなかった。

第4章では、「武士道」と、それを批判した安成貞雄をとりあげる。武士道は、福沢諭吉や新渡戸稲造によって作り出された資本主義のイデオロギーであった。

第5章では、伝統主義論争を考察する。この論争は、第一次世界大戦の時代に起こった。東京大学のフランス文学者がフランスの伝統主義を紹介し、次に、日本のナショナリストや、早稲田大学の自然主義者たちが議論に参加した。伝統主義とは、土地と祖先が国民精神をつくるという考え方である。

第6章では、島崎藤村の『新生』（1919年）を対象として、「伝統」や「故郷」が、知識人の精神をどのように形成しているのかを、具体的に分析する。

最終章では、もう一度、「近代思想」に関係した人物たちの活動をとりあげる。荒畑寒村や、相馬御風は、日常生活や政治活動と文学との関係を論じた。これは実行と芸術論争と呼ばれている。彼らが、文学を通して、イデオロギーによる支配にどのように抵抗しようとしたのかを考察する。